

課題遂行事態における動機づけ的要因に関する研究

—— 期待の効果について ——

鈴木 真 悟

I. 問題・目的

課題遂行事態におけるパフォーマンス期待の要因が、Atkinson (1964) の分類した期待×価値理論とは異なった角度から、すなわち、認知的一貫性理論の枠の中から問題にされてきている (Aronson & Carlsmith, 1962 ; Kaufmann, 1962 ; Backman, 1964 ; Gerard, Blevans & Malcolm, 1964)。これらの研究は、パフォーマンス期待とパフォーマンスとの認知的一貫性の保たれ方を問題にしている。中でも Aronson & Carlsmith の研究は、低い期待に対して高いパフォーマンスを得た群よりも、その試行を再行させた場合、前回の回答をより多く変化させる (パフォーマンスが悪くなることを意味する) ことを見出し注目されている⁽¹⁾。

以上の研究は、所与の課題に対するパフォーマンス期待の高低が問題にされているが、一般的、常習的なパフォーマンス期待としての自尊心でも又、重要な要因である。いくつかの研究は、自尊心の高い者と低い者とは、成功・失敗に対して異なった反応を示すことを示唆している (Stotland, et al, 1957 ; Cohen, 1959 ; Silverman, 1964)。又、パフォーマンス期待とパフォーマンスとの一致・不一致を考える場合、不一致の程度も考慮される必要がある。

そこで本研究においては、特定の課題に対する期待の高低、一般的なパフォーマンス期待としての自尊心の高低、及び課題に対する期待とパフォーマンスとの一致・中程度の不一致・著しい不一致との関連において、次の3つの問題とそれに対する仮説を検討することを試みた。

〈問題1〉所与の課題に対するパフォーマンス期待の高い群と低い群とでは、課題に対する動機づけが異なるか。

註 (1) 彼らの研究に刺戟されて、いくつかの研究が行われたが、彼らの仮説を支持しない結果がむしろ多い。

〈仮説1〉課題に対し、確立した高い期待をもっている群は、期待の低い群より、課題を行なうことへの動機づけが高く、従ってパフォーマンスも高い。

〈問題2〉期待とパフォーマンスとが大きく異なった場合、自尊心の高い群と低い群とでは異なった特徴的な反応をするか。

〈仮説2〉(1)期待が高く、パフォーマンスが低かった場合—高自尊心群：(i)期待をあまり下げない (期待水準を下げた場合でも理想水準・最高水準はあまり下げない)。 (ii)低いパフォーマンスをあまりネガティブでないものとして受けとめる。 (iii)他の認知的要素を「ゆがめ」、低いパフォーマンスを脅威的でないものとする。低自尊心群：(i)期待を著しく下げる。 (ii)著しいネガティブな感情を示す。(2)低い期待に対して、パフォーマンスが高い場合—高自尊心群：(i)期待を大きく上げる。 (ii)非常にポジティブな感情を示す。低自尊心群：(i)あまり期待を上げない。 (ii)それ程ポジティブな感情を示さない。

〈問題3〉期待とパフォーマンスとの一致・中程度の一致・大きな不一致が、高自尊心群の課題を続けることへのモチベーションにどのような効果をもつか。

〈仮説3〉高自尊心群：期待の高低にかかわらず、動機づけの高さは期待の高さに一致する。低自尊心群：期待が高い場合は、最も高いパフォーマンスに対して最も動機づけが高く (但し、高自尊心群の場合ほど高くない)、最も低いパフォーマンスに対して、動機づけも最も低い。期待が低い場合は、むしろ中程度のパフォーマンスに対し最も動機づけられるであろう。

II. 方法

以上の問題を検討するため、3つの実験を行なった。実験のデザインは共通している。まず、中心になっている課題に対するパフォーマンス期待の高低を操作する (第1操作)。次に、その中心的課題を行なわせ、高・中・低の3段階の得点をフィードバックした (第2操作)。実験群・統制群は表1に示す通りである。

表1 実験群・統制群

	実験群						統制群 C
	高 H			低 L			
第1操作	高 h	中 m	低 l	高 h	中 m	低 l	
自尊心							
第2操作							
高自尊心 H _{SE}	H _h -H _{SE}	H _m -H _{SE}	H _l -H _{SE}	L _h -H _{SE}	L _m -H _{SE}	L _l -H _{SE}	C-H _{SE}
低自尊心 L _{SE}	H _h -L _{SE}	H _m -L _{SE}	H _l -L _{SE}	L _h -L _{SE}	L _m -L _{SE}	L _l -L _{SE}	C-L _{SE}

実験は集団実験。自尊心は、Janis & Field (1959) のものを翻訳して、実験の数日前に測定。実験ⅠⅡⅢの被験者、課題、第1操作の差異は、表2に示されている。従属変数は、期待（期待水準・理想水準・最高水

準）、課題の評価、課題を続けることへの動機づけ、種々の感情についての評定などである。なお、実験Ⅲにおいては、第2操作を3回繰り返した。

表2 実験Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの被験者、課題、第1操作

	実験Ⅰ	実験Ⅱ	実験Ⅲ
被験者	中学1年生 192名	中学1年生 174名	中学2年生 192名
課題	組合せ課題 抹消課題（中心的課題）	抹消課題：アルファベット 抹消課題：仮名文字（中心的課題）	ことわざの解釈。 3つの選択肢の中から選択
第1操作	組合せ課題を4課題。それぞれについて偽得点でフィードバック	予備調査における抹消課題2課題のフィードバック。 抹消課題4課題とそのフィードバック	国語の成績の認知により被験者を分ける。 第1番目の課題に対するフィードバック

実験Ⅲにおいては、Aronson & Carlsmith の実験で行なわれたように、課題を再行させ、回答の変化数を調べた。他の研究者達から指摘された要因が取り除かれ、しかも目標を設定させる事態においても、彼らの仮説通り、変化数は、期待とパフォーマンスとが不一致の場合に多いであろうか。又、この測度によって示される達成指向的動機づけと、課題を続けることへの動機づけと関連があるだろうか。以上の問題に対し、両動機づけは異なった心理的過程であり、変化数は、誤った数と対応することが予測された。〈問題4〉 〈仮説4〉。

Ⅲ. 結果及びその解釈

主な結果は、表3、4に示されている。問題4に関する結果は、期待の高低にかかわらず、第2操作で得点が高い群ほど、再行における回答の変化数は少なかった。

問題1について。実験Ⅰ、Ⅱではパフォーマンスの測定にも問題があった。又実験Ⅲの結果から動機づけの高低を、期待の高低に帰することは妥当でない。

問題2の結果。実験Ⅲにおいて、H_{SE}群とL_{SE}群とは、仮説に示したような異なった期待の変化を示した。

この結果は、「H_{SE}群が成功に対して、L_{SE}群が失敗に対して感じやすい」との Silverman の考えを支持し、Nisbett & Gordon (1967) のそれとは逆の考えを否定する。

問題3について。実験Ⅰ、Ⅱにおいて、H_h群はH_m群より動機づけが低い傾向を示したが、このことは、期待を操作するため、類似の課題をくり返し、同じ程度の得点のフィードバックを受けたことが課題への動機づけを低めたと考えられる。このことは、McClelland, et al. (1953) などの考えに一致するとともに、期待の効果を単にその高低だけで論ずることができないことを示唆する。又、実験Ⅲで、H_l-H_{SE}群がH_l-L_{SE}群より期待を低めなかったが、動機づけをより低めた。この結果は、Silverman のH_{SE}群は「自己を低める刺激に感じにくい」という考えより、Cohen の「脅威的刺激に回避的防衛機制をとる」との考えを支持する。

問題4の結果は、少なくとも実験Ⅲのような事態においては、Aronson & Carlsmith のいう、低い期待に行動を合せるとい認知的一貫性を求める動機づけがほとんど生じないことを示す。

表3 主なる結果

		実験Ⅰ	実験Ⅱ	実験Ⅲ
問題1	H群	H群, L群のパフォーマンスの変化に差が見出されなかった。	H群, L群のパフォーマンスの変化に差がなかった。	第1回のフィードバック後において, H群は, L群より動機づけが高かった。
	L群			
問題2	期待の変化	H _{SE} 群, L _{SE} 群ともに著るしく下げ, 両群に差なし。	H _{SE} 群, L _{SE} 群ともに著るしく下げ, 両群に差がなかった。	L _{SE} 群は H _{SE} 群より期待水準をより下げる傾向を示した。
		H _{SE} 群, L _{SE} 群の変化量に差がなかった。	H _{SE} 群, L _{SE} 群とも, 大きく上昇させ, 差がなかった。	H _{SE} 群は L _{SE} 群より期待水準・理想水準を上げる傾向を示した。
	感情尺度に対する反応	L _{SE} 群は, H _{SE} 群よりネガティブな感情を示した。	H _{SE} 群とL _{SE} 群とどちらがネガティブな感情を示しているかは尺度により異なる。	ネガティブな感情を表わす尺度において, L _{SE} 群は, H _{SE} 群より, よりネガティブに変化する傾向を示した。
		H _{SE} 群とL _{SE} 群とに差はない。	H _{SE} 群は L _{SE} 群より, ポジティブな感情を示した。	H _{SE} 群と L _{SE} 群とは差がみられなかった。
問題3	H _h 群	H _{SE} 群, L _{SE} 群ともH _l 群が最もモチベーションが低く, H _h 群, H _m 群は同じ程度である。しかしH _m -H _{SE} 群は H _h -H _{SE} 群よりモチベーションが高い傾向を示している。	H _{SE} 群, L _{SE} 群ともH _m 群が最も動機づけが高い傾向を示していたことは, 特に H _{SE} 群の場合, 顕著であった。	H _{SE} 群の場合, 第2操作に対応した変化を示した。L _{SE} 群の場合, H _h 群, H _l 群で動機づけを低めた。
	H _m 群			
	H _l 群			
問題3	L _h 群	H _{SE} 群, L _{SE} 群とも, L _l 群が最も動機づけが低く, L _h 群, L _m 群は同じ程度であった。	H _{SE} 群の場合, L _h 群が L _m 群よりわずかに動機づけが高く, L _{SE} 群の場合, L _m 群が L _h 群よりわずかに動機づけが高い傾向を示した。L _l 群は最も低かった。	H _{SE} 群の場合, 第2操作に対応した変化を示した。L _{SE} 群の場合, L _h 群, L _m 群ともあまり動機づけを高めず, 両群に差がなかった。L _l 群は最も低い。
	L _m 群			
	L _l 群			

表4 第2操作の効果

		H _h	H _m	H _l	L _h	L _m	L _l	C
実験Ⅰ	期待水準	34.33	27.00	20.00	32.38	21.82	17.57	26.13
		33.08	28.69	18.69	24.44	23.50	18.31	24.62
	課題への動機づけ	3.61	3.07	4.50	3.81	3.73	4.43	5.31
		3.75	3.69	4.46	3.44	3.44	4.15	4.85
実験Ⅱ	期待水準	33.93	28.33	18.91	28.30	24.00	13.70	24.90
		35.27	24.83	19.20	28.67	22.46	13.87	23.18
	課題への動機づけ	5.87	3.75	4.73	4.00	4.18	5.20	4.95
		5.18	4.58	4.90	4.67	4.31	5.13	6.00
実験Ⅲ	期待水準	6.23	4.69	4.02	5.25	4.14	2.35	4.04
		5.47	4.71	3.13	4.20	4.00	1.98	3.91
	課題への動機づけ	4.10	4.75	5.83	3.92	4.67	5.90	6.47
		5.64	4.82	5.19	4.84	4.49	6.28	5.44

注 期待水準 実験Ⅰ, Ⅱ: 0~50 実験Ⅲ: 0~10
 課題への動機づけ 実験Ⅰ, Ⅱ: 7段階尺度 実験Ⅲ: 8段階尺度
 (数字が小さい程動機づけが高い)

<参考文献>

- Aronson, E. & Carlsmith, J.M. (1962) Performance expectancy as a determinant of actual performance. *J. abnorm. soc. Psychol.* 65, 3, 178-182.
- Atkinson, J.W. (1964) *An Introduction to Motivation*. New York Van Nostrand.
- Backmann, J.G. (1964) Motivation in a task situation as a function of ability and control over the task. *J. abnorm. soc. Psychol.* 69, 272-281.
- Cohen, A.R. (1959) Some implication of self-esteem for social influence. In Hovland, C.H. & Janis, I.L. (Eds) *Personality and Persuasibility*. New Haven : Yale Univ. Press, 102-120.
- Gerard, H.B., Blevans, S.A., & Malcolm, T. (1964) Self-evaluation and the evaluation of choice alternatives. *J. Pers.* 32, 395-410.
- Kaufmann, H. (1963) Task performance and responses to failure as functions of imbalance in the self-concept. *Psychol. Monogr. General and Applied*. Whole No. 569.
- McClelland, D.C., Atkinson, J.W., Clark, R.A., & Lowell, E.L. *The Achievement Motive*. New York.
- Nisbett, R.E. & Gordon, A. (1967) Self-esteem and susceptibility to social influence. *J. Pers. soc. Psychol.* 5, 268-276.
- Silvermann, I. (1964) Self-esteem and differential responsiveness to success and failure. *J. abnorm. soc. Psychol.* 69, 115-119.